哀愁の秋

二十四歳

1918・11・？

全文

秋の此頃ただ何とはなしに遣る瀬なく今宵はとのもに虫の声のみしげくして、訪る人もなく眠り難きまま筆を取りました、淋しい！

心も身も淋さに堪えられず、うわべを飾る社交か、心の通わぬ木偶の恋か、然らざれば独り居の読書か、その外に私の生活は何ものをも有せず

世にほんとうの自分の心持を了解して呉れる者なき程悲しきはなし偽りの友、偽りの恋人はあり、されど只真個の何者もなきを恨む、秋が淋きか、この世が淋きか

昨夜は小学校でおとぎ会を開き大いに調子に乗って気焔を吐ました、会終り小宴が張られたが、私は人知れぬ淋さに襲われました、他人の感など顧みる余裕のない程鬱ぎ込ました、酒飲みて酔い得ざる悲しみ、耽溺し乍ら耽溺し得ざる悲しみ、はては徹底を熱望して徹底し得ざるやる瀬なさ程世に苦しきはなし

初めは主動者となって紅灯の巷に遊びに行くこともありますす、がいざ酒を酌み、三絃を聞く頃になって深き物思いに沈

初出・底本　伊勢新聞／大正七年十一月か　伊勢新聞社　＊貼雑年譜に収録。新字体、現代仮名遣いに改め、総ルビをパラルビとしたほかは原文のまま。送り仮名の過不足はルビで補った

みゆくは私の常です、人はその何故なるやを怪しむ

ああ何人かわが苦しみを察し得べき、我に心寄せたりとて歓待し呉るる舞妓の只何とはなしに可愛きは人の至情、されど深夜人なきに語って、真の我を解し得ざるに会えば可愛ゆき人のわが心を酌み得ざる恐ろしきまでの淋しさを味わうを常とします

今宵とても淋しきままいとしきその妓に逢い度からぬにはあらねど、只逢いて後の幻滅の哀しみに堪えやらず、美しい幻影を確と抱いていたいから……吁、かくて人生は遂に淋しきものか、人は遂に一人、我は我のみを心の友とすべきものかな、近頃カラマーゾフを読み彼等こそ我心の友とやら感ずるに至った、由来私はカラマーゾフ式――大きく言えばロシア式とも申すべきか

いやいやドストエフスキーのみでなく、トルストイでも、アンドレエフでも、モーパッサンでも、ボードレールでも、ワイルドでも小川未明でも、谷崎潤一郎でも偉大な詩人は凡て我心の了解者である、左様詩人こそは人の心の了解者である

私は人間矛盾の解決を熱望し乍ら一時の安きを願ってかかる生活をしています、その罪あるを痛感し乍らも弱き肉体の所有者なる私、心はもっと徹底的に！　もっと向上驀進せよ！　と叫んでいるにも拘らず躊躇しています

哀愁の秋　署名は「H・T生」。「伊勢新聞　大正七年秋」との説明を添えてスクラップされ、その下に「大正七年ノ秋デアッタカ、物価騰貴ノタメ月給ガ一躍三倍程ニ上ッタコトガアル。ソコデ私ノ収入ハボーナスヲ加算スルト百円程ニナッタ。ソンナコトカラデアラウ、同年十一月ニハ鳥羽町ノ松田トイフ金持医師ノ別荘ヲニ十円ホドノ家賃デ借リ受ケ、一人デソコニ住ムコトニシタ。食事ハ仕出シ屋カラ運バセタノデアル。／上ノ新聞切抜キハ、ソノ家カラ、当時知合ヒニナッテヰタ津市ノ伊勢新聞ノ文芸部主任ニ感想ヲ書イテ手紙ヲ出シタノヲ、ソノ人ガ勝手ニ候文ヲ口語体ニシテ、同紙ニノセタモノデアル。（コノ家デ初メテド翁ノ「カラマーゾフ兄弟」「罪と罰」ヲ読ンダ）」とある。

謎の人生その謎はスフィンクスの与えた問題よりも難しい、スフィンクスの謎は明答を得た、が人生の謎は古来幾多の哲学者に依って解説されたが、其観察は「盲人の象見物」或者は象の鼻のみに触れて蛇の如しとなし、或者は牙に触れて槍の如しとなす

吁人生は畢竟謎である、謎の解くべき鍵が無い、謎に答うるに謎を以てせらる

迷い！　淋しみ！　是れが私の心を襲っている処のものである

人生の謎を解くべき、エディプス王は何時現れ来るか知らん？